出会い　ふれあい　助け合い

サロン・あべの

＜サロン・あべの＞NO．45　　平成　2年　3月17日（土）発行

Christmas Video in SALOON　クリスマスｉｎサロンの思い出

＜サロン・あべの＞二月の出会い

背に日だまりの暖かさを感じると目が自然に笑いだす、そんな窓辺が嬉しくなった平成二年二月十七日（土）午後一時～四時、育徳コミュニティーセンター二階の研修室に於て、「思い出（クリスマスinサロン）をふたたび」と題して、昨年十二月の出会い　クリスマスinサロンのビデオ（撮影・植松菊雄氏）と、昨年十二月八日全国放送されたＮＨＫテレビ「障害者は今…自立した障害者の生活」のビデオ観賞の集いを持った。

クリスマスソングをバックに、あの日が再現・・・映しだされると、客席から密やかな笑い声が聞こえてくる。これはテレビに映る自分の顔に、なぜか面映ゆさを感じるかららしい。どこかぎこちなく、それでいて他人ではない自分自身がいるテレビ出演に一時の異次元を体験した。

同時上映の「障害者は今・・・自立した障害者の生活」は、セルフ社の井上氏とその家族の紹介から始まる。帰宅した井上氏を優しい雰囲気で奥さんと可愛い二人（長女＝小四・長男＝小一）の子供さんが出迎えられる。障害者の自立についてのインタビューに答えてご夫妻は異口同音に「普通の生活を毎日繰り返していくことが、障害者の社会参加運動の一つ」と。

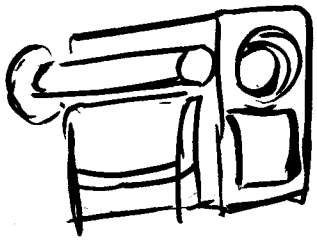
この後カメラはセルフ社でアシスタントマネージャーとして修業中の村崎氏の新婚家庭を映す。障害者同志の二人にとって、日常の生活をあたりまえにしていくことは、並み大抵のことではない努力が要るが、自分達で作りあげていく家庭、日々の充実した生活は喜びになる。

仕事を終えて家に着いた時、窓の灯りが嬉しいと言われた村崎氏の笑顔に、お二人の幸福せを見た。

ビデオを見終った後、初めて参加された方に自己紹介をしていただいたり、四方山話しをしたりして暖かい余韻をたのしんだ。

ビデオパネラーは、植松菊雄氏でした。

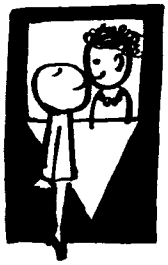
この日の参加者、十九名。司会は富田。



走る 電動車イス

二月の例会で、電動車イスが話題になりました。時速四・五～六キロの足。みなさんの足、電動車イスのお話をまとめてみました。

○ 千場正夫氏＝電動車イスは重いので、階段を担ぎ上げてもらったり、下してもらうのが大変。バスにリフトがあればええのになぁ。全車とはいかずとも、一部そのバスが走ってくれたら、どこへ行くにも助かるのになぁ。

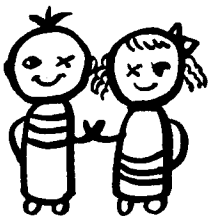


○ 浜本浩喜氏＝いつもおしゃれでトレンディ。会うたび新しいファッションを見せてくれる。それが車イスに迄及びこの日は、上下動が出来る電動車イスの新車で登場。アッといわせた。日本に数台しかないというしろ物。お値段もなんと五〇ウン万円なり。スイッチ一つで床まで降りたり、立ちあがった高さ感覚まで座席が昇ったりするので入浴はもちろん、目線の違う世界を知ることが出来て面白いとのこと。

○　柿岡　緑さん＝いつも電動車イスで小まめに、あちらこちらへと出かけておられる。お一人で動かれるのは少なく、たいていい仲よくご主人がご一緒。この姿、一見電動車イスの介助者風に見受けられるが、実は奥さんが電動車イスで手引きをされておられる。ご主人の健脚ぶりには、いつも感心させられている。

○　冨田慶子さん＝電動車イスに乗って一番遠い所へ行ったのが、長居植物園。地図で距離を計ったら二キロちょっと。踏切が怖い、歩道の切り込みスロープや駐車が怖い等々こわいものずくめで、今だに遠出が出来ない臆病者。あれこれ想いながらも一人で動ける気楽さは、知れば知る程楽しく、この味忘れがたい。
　安全な移動の保障を希いつつ、遠出にも挑戦していきたいもの…。

○　斉藤孝文氏＝遠くへボランティアさんと出掛ける時は、手動車イスを使い、一人で行ける範囲の距離であれば、電動車イスで外出と、手・電二刃流の使い手。



○　南光仁子さん＝電動車イスの奥さんの後ろでしっかりと押し手を握った夫君は手動の車椅子。いつも婦引夫従の二重連動で仲のよいことこの上なし。活動範囲がかぎりなく拡がり今や全世界・・・。

○　山本篤江さん＝電動車イスのスラローム で、金メダルを獲得された程の腕前を持つ超ベテランだが、踏切の横断は怖いと言われる。それは以前、友人の車イスを引いていて踏切で連結がはずれてそのまま置いてけぼりにしたことがあるから。慣れに流されずいつも安全運転を心がけていると言われる。

おしらせ

＜サロン・あべの＞四月の出会い
日　時・・平成二年四月二一日（土）
集合時間・午後十二時。（帰着予定＝五時）
集合場所・育徳コミュニティーセンター
　　玄関前。
内　容・・大阪市立科学館見学
☆オムニマックス（魚眼レンズから
　投影される世界最高の映像システム）
☆プラレタリウム。（星座の観賞）
会　費・・五〇〇円（身体障害者手帳をお
　持ちの方は、必ずご持参下さい）
交　通・・貸し切りバス（リフト付き）で
　西田辺〜科学館間往復します。
申し込み・☎〇六－六九一－一〇二八
　　（冨田慶子迄）
※定員二五名になり次第締切ります。

古い手紙との別れ

先日、ボール箱いっぱいの手紙を整理しなければならないと思った。狭いぼくの家には、そうそういつまでも古い手紙に与えておくスペースがないような気がしたからである。

それに、もう差出人もとっくに忘れてしまったような手紙は、有効期限の切れた証文か契約書のようなものだ。書いた人からも読んだ人からも忘れられてしまった言葉を繰り返す、色あせた古い手紙は、廃屋になった家の門で人を呼びつづける疲れた小間使いの少年のように、場違いな自分の存在を悲しんでいるにちがいない。

もしもぼくの手紙が、誰かもう長く疎遠になってしまった人のところで、あいかわらずの赤裸々な告白や感情の吐露を繰り返しているのなら、それを考えただけで恥ずかしくなってしまう。古い手紙たちも、もういいかげんにしてくれ、と言っているような気がする。

職場にシュレッダーという便利な機械があり、書類などをあっという間に実に細かく切ってしまう。古い手紙を生ゴミといっしょに捨てるのは申し訳ないような感じだし、かといって焼却する場所も見つけられなかったぼくに、それは、古い手紙との別れの場所を与えてくれたのである。

手のひらいっぱいの手紙も、機械の軽いモーターの音とともに数秒で色とりどりの細い紙の筋と変わっていく。それを見ていると、その手紙を受け取った当時のことや、はて、この返事にはどんなことを書いたのだろうと考えてしまう。

いや、それよりも、いったいどれだけの多くの時間と思いが、ただぼくへの手紙のためだけに使われ、流れていったことか。しかも、差出人たちは、それをことさら覚えてはいないだろう。ぼくも、これだけの手紙に返事を書いたに違いないのだが、やはりほとんど何も覚えてはいない。

ふと、古い手紙のなかに、優しい言葉や思いやり、いたわりの言葉を見つける。多くの言葉や心が、手紙を通して交わされたのだと思う。しかし、その言葉を書いた人は、もうそれを忘れているだろうし、また、ぼくと会う機会も、電話で話し合うこともないだろう。

とすれば、それは何のためだったのだろう。これだけの時間と労力は、何のために使われたのだろう。

多くの時間を費やして、ぼくたちは話し合い、語り合い、慰めあい、励ましあってきた。しかし、それも時がたてば、記憶の片すみに追いやられ、話し合った人たちも遠ざかっていく。そして、いつかは完全に忘れ、手紙は、消えかけた足跡のように残るのである。

しかし、いま、優しい言葉に気づくのは、以前にどこかで受けた言葉の暖かさが、心のなかに残っているからではないのか。いま、いたわりの心を人に向けることができるのは、むかし、どこかで、もう忘れてしまった誰かから快い笑顔で迎えられたからではなかったか。

人間の交わされた心は形を変えて残っていくのではないかと、ぼくは考えている。いちど暖かい心が交わされると、次には暖かい心がもっとより深く広く交わされるような、そのような下地ができるのではないかと思う。

そして、人間ひとりひとりが交わしあった心の軌跡は、人から人へ、世代から世代へと伝えられ、積もり重なって、人間の歴史をつくっていくのではないか。

古い手紙の束は、もう捨ててもいいのではないかと思っている。そこで伝えあった言葉や思いの記憶はうすれても、そこから与えられたあたたかい心は、ぼくの日々の生活の血や肉になっていると信じているのだ。

（知）

THE DEAF MUTE 34

旭　純子

大阪府地域福祉計画について（2）

大阪府地域福祉計画（ファインプラン）の柱は三点あるが、それぞれの主な施策についてみてみたい。

第一は社会保障。これは安定した生活をおくるための生活基盤づくりとしての年金医療保険制度の充実・最低生活の保障など。

第二は地域福祉の土壌づくり。これは地域福祉を支える人づくりと地域福祉活動を支えるものづくりにわけられる。

☆地域福祉を支える人づくりのために

広報・啓発・・・福祉情報システムの設置や会議前五分間運動の実施など

教育・・・勤労体験学習などの活用やボランティア活動の振興、各種の研究教育機関による公開講座、研修の実施

住民参加・・・一人一日ボランティア運動、福祉イベントの実施、市町村ごとのボランティアビューローの設置

☆地域福祉活動を支えるものづくりのために

福祉の街づくり・・・府有施設の計画的改善、市町村福祉の街づくり推進事業、駐車対策・放置自転車対策の推進

施設づくり・・・お年寄り・障害者の利用への配慮

社会福祉施設の機能の充実・・・デイケア、ショートステイの拡充、施設の地域交流に対する助成制度

そして第三は地域福祉の具体的展開。

☆在宅福祉の充実のため・・・ホームヘルパー派遣事業の充実、寝たきり老人や痴呆性老人のショートステイ事業、デイサービス事業の拡充

☆健康・体力づくりのため・・・地域に置ける健康作り推進事業の実施、老人保健事業や医療費公費負担事業の実施、学校体育施設の解放、スポーツ大会やスポーツ教室の開催

☆生きがいの条件づくりのため・・・府立文化情報センターの充実、老人大学・高齢者教室の開催、シルバー人材センターや授産事業・障害者社会参加促進事業の充実

☆就労・就業の場づくりのため・・・高齢者職業相談室の整備、働く機会の拡大のため授産施設・事業の設置福祉工場への取り組み、職業訓練校の整備・充実

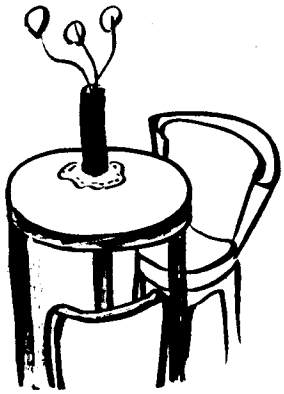
この施策計画のようにひとりの人間をめぐる援護体制は今や一方向からのアプローチだけではなく、様々な方面から総合的に並行したかたちで行われてこそ、よりよい状態であるということが理解できよう。そしてそれは行政的にみても、もはや福祉行政のみの問

題にとどまらず、教育、保険、医療、労働など様々な機関との密接な連携の必要性を意味している。

すなわち「参加する福祉」「在宅福祉」が叫ばれる現在、日本型縦割行政の壁を取り払って横のつながりをより密接にし、包括的なサービスが行えるような体制づくりがひつようとなる。そしてそれは殊にろうあ者、障害者、老人などにとどまらず、ひとりひとりの人間の一生のライフサイクル全般を通じて必要なときに最も適していると思われる方法を選択して生活を維持していけるような体制の必要をも意味している。

これらの諸施策計画が崇高なうたい文句としてのみ存在することのないようひとりひとりが問題点を明確にしていけるような自覚を持ちたいものである。

美智子のこんな話



岸田　美智子

性格が悪いから外出できない……!?

Nさんは五三才になる、目のクリッとしたもの静かなおじさんでした。彼は市内のある施設に入って二〇数年になり、それ以前は生れてから三〇歳すぎまでズーッと在宅で暮らしてこられた車椅子の男性障害者です。

私がそんなNさんに出会えたのは、「施設の障害者外出サービスネットワーク」をはじめてまもない、つい最近の事です。

そんなNさんがいるその施設側から「Nさんはちえおくれでお金の計算ができないし（お金を使う体験が全く奪われた為だと私達は思うのですが？）、この前に外出して以来、毎日外へ出たがり、パニックを起し職員を困らせるので、このサービスはお断りします。」などという事で断られてしまいました。

まだまだ、あたりまえの生活が出来ない施設生活ですが、今まで介助については、保障されているという事で片付けられてきましたし、さらに、地域でのガイドヘルパー制度からも外されています。

でも、現実には職員が足りなくて毎日の生活介助におわれていて、個人的な外出はほとんど出来ないのです。

それに、起床時間や就寝時間は勿論、食事時間、お風呂時間、消灯時間それに、施設によってはトイレ時間も決められている所もあります。おまけに異性介助が当然のごとくまかり通っているのです。

このようなひどい施設生活を少しでも変えて行きたくて、施設障害者が意見を言うと、より厳しい施設へ行かされたりするのです。

Nさんの場合もより不便な山奥の施設へ行かされるという噂を聞いたので、苦労してNさんに私達が会うことになり、色々な

事実を知る事が出来ました。

Nさんは私達がはじめたこのサービスで、五〇歳を過ぎて初めてデパートへ行ったそうです。この施設へ入って二〇年、親は亡くなり、友達もボランティアにも巡り会えず、それなのに外出するには親など家族の許可がいるため、全く個人で外出させてもらえなかったのです。

決められた時間だけテレビなどを見ているだけで、何もする事がない毎日、そんな空しい毎日を二〇年もおくらされて来たNさん…。

そんなNさんに会った時、「もう、ここにいても何もする事がないのでイライラするし…。だから、施設から言われている他の施設へ行ってみたら何か仕事があるかなぁと思って…。何か仕事がしたいんや！紙を入れていったり…。こっちの手だけやったら出来ると思うんや。」と言っておられました。

この言葉を聞いた時私は、二〇年もの長い時間、閉鎖的な日本の施設の在り方が、Nさんから奪ってきたものの大きさ、Nさんの人生にあったであろう色々な出会いやチャンスなどを考えてしまい、思わず怒りを感じていました。そして、なお働きたいという希望を持ち続けているNさんのすごさに感動してしまいました。

施設側がいう他の施設とは、市外になるより不便な所にあり、ましてや施設内の障害者に仕事などさせてもらえる施設ではありません。それはきっと私達とのつながりもあり、毎日うるさく職員に迫るNさんを切ってしまいたいのでしょう。

お会いした時に繰り返し繰り返し「仕事がしたいねん。ここにおっても何もする事がないからイライラするねん。もうここにおるのは、イヤヤねん！！！」といっていたNさん。そんなNさんに、「Nさんは性格が悪いから外出はだめだ。」などと、訳のわからぬ事を施設側は言い続けています。

私達はもうすぐ、このNさんのいる施設の園長や職員の人達と、ゆっくり話し会う予定になっています。

外出時の事故の問題や施設運営基準（予算や職員数の問題などを含む）など社会的に大きな問題が絡んできますが、一日も早くNさんが、そして、多くの施設障害者が自由に外出できるようにしたいものです。

＃感謝します＃

カンパ・お茶菓子・マジックインデックス・茶封筒等、ご協力ありがとうございました。お礼を申し上げます。

二月のカンパ　金一〇〇〇〇円

秋山紀美子、植松菊雄、大里哲子、木村圭子、中野君江、矢嶋博士。

匿名二名様（敬称略）

∞サロン・あべの紙の朗読テープが出来ました∞

「阿倍野区ボランティア連絡協議会」の朗読グループのご協力により、サロン・あべの紙の録音テープを作っていただいています。バックナンバーは三八号、三九号、四〇号、四一号、四二号、四三号があります。サロン紙朗読テープご希望の方は、冨田までお申し出下さい。（TEL06-691-1028）

『コミュニティとボランティア活動』

上平幸雄

第4回の阿倍野区ボランティア交流会が、二月二十四日（土）午後一時半より育徳園保育所三階の幸分ホールにおいて開催されました。大阪府立大学社会福祉学部の学部長であります右田紀久恵氏の講演「コミュニティとボランティア活動」を聴こうと、本当にたくさんの方々が来られていました。

講演された内容のとおりとはいきませんが、自分なりに、簡単にまとめてみたいと思います。

社会福祉の動向として、国や地方自治体の政策が施設から在宅へと変化し、地域におけるボランティアの役割がますます大きくクローズアップされてきています。一部には、こうした動きを安上り福祉として、批判する声もあります。しかし、人として、施設ではなく地域で生活していきたいと思うのは、誰しも当然のことなのですから、在宅福祉の方向は間違ってはいないでしょう。でも、そこで問題になるのは、地域でボランティアをする側の意識だと思います。

ボランティアは決して行政の下請けになってはいけないのです。ボランティアの役割は、地域における福祉ニーズを掘りおこし援助すると同時に、地域住民とのパイプ役として行政にも働きかけていき、その援助システムを公的な制度にまでもっていくことなのです。

また、ボランティアとは、個人のあくまでも自主的な活動であること。無償だからボランティアというのではなく、ボランティア活動そのものが、金銭に換算できないほど、尊いものだから、無償なのだということ。そして、ネットワーク化の必要性なども心に残りました。

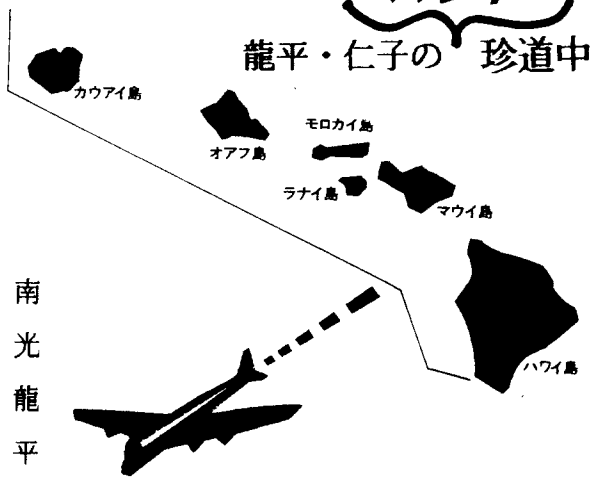
「サロン・あべの」の活動の場合には、一般的にイメージされているような、今までのボランティアグループとは違いますので、右田先生のお話しを、そのままあてはめて考えることはできません。しかし、毎回多くの参加者があることを見ても、地域において必要な活動であることは明らかです。サロン紙の配布部数も確実に増えてきています。

これからの「サロン・あべの」を考えると、まず、サロンの活動がボランティア活動であるということを、もっと広く理解してもらう必要があると思います。

障害者はボランティアをされる側であり、ボランティアは健常者でなければならない、という古い福祉の考え方を変えていかなければなりません。たとえ健常者であっても、精神的に深い悩みを抱えている人がたくさんいます。逆に、体に障害があっても、その障害があるが故に、人間的に成長する人もいます。車椅子を押すというようなことだけがボランティアではありません。押されている障害者の方が、押している健常者を精神的にケアする関係もあり得るのです。

障害者だからとか、健常者だからとか、という区別を無くして、お互いに人間として集い、語り合うなかで成長していく場、その提供がサロンの活動であると思います。

ハワイ 龍平・仁子の珍道中 ⑤



南光龍平

Mr.ネイル 気はやさしくて力持ち

ハワイ二日目は、絶好の「ハワイ日和」。というのも変だが、とにかくいい天気。前の日は少しだけだが雨にあったが、この日はそんなことは全く心配なし。

ホノルル近辺をまわった前日とは違い、パイナップル畑やさとうきび畑のなかを巡り、自然を満喫するコース。

見渡すかぎりのパイナップル畑の中の道を、私達は、例の如くハンディキャブを駆って進んで行く。ハワイの経済は、観光だけで支えられているというような思い込みが強かった私には、車窓から見える風景はハワイにとって農業も経済面で大きなウエイトを占めていることを、改めて教えてくれるものだった。もちろん観光や農業だけでなく、軍事基地という「重い」存在もハワイにはあるのだが・・・・。

それはともかく、四方をさとうきびやパイナップルのじゅうたんで囲まれ、ゆったりした気分で車内のおしゃべりも盛り上る。特に、子供の頃さとうきびをおやつに食べていたという我が女房の昔話をきっかけに、あれやこれや（注＝年齢ものことが中心）と話が弾み笑い声が車のなかに溢れた。車内一同の次から次へ流れ出してくるような話を、運転手に通訳してくれている添乗員のNさんもひと苦労。なかには、通訳できないような話もどんどん飛び出してくるのだから。

ひとしきり笑ったあとに、私達の目に飛び込んで来たものがあった。

日本でもバナナなどで馴染みのある、太陽を模した「ドール」のマーク。じつはこれ、パイナップルの缶詰め工場の前に、モザイクが花時計のように形どられたもので、近付いてみるとかなりの大きさ。もちろん、この缶詰工場もハワイの観光名所のひとつとなっていて、結構沢山の人達がのんびりと工場見学を楽しんでいる、といった風景。

私達は、車からは降りずに添乗員のNさんと運転手にお願いして、パイナップルのジュースや一口サイズにカットしてある実を買ってきて貰い、車内でひと休み。言うまでもないが、味はまさに＜Very good＞で、本場の良さを味わうことができた。

ところで、この二日間ハンディキャブで私達をいろんなところに案内してくれていたドライバーを、このあたりで紹介したい。お名前はMr.ネイル。日本で言えばさしずめ「爪さん」。ハンディキャブの乗り降りの介助の手際の良さはもちろんだが、細かなところまで気の付く人で、この日の夕

食は和食にしたいという私達の話を聞いてくれていて、いつの間にか二、三軒の日本食の店を捜してくれていたりして、文字どおり気はやさしくて力持ちといった感じの人。堂々の体格にあごひげをたくわえた風貌は一見、元阪神タイガースのR・バース。何度か私達とカメラに納まってくれたが、「日本に帰ったら、この写真をみんなに見せて、ハワイでバースに会ってきた、って言えるな。」なんて冗談を言ったところ、Mr・ネイルもバース選手のことは知っているとのこと。阪神ファンの私には、何となく嬉しいひとこまだった。（つづく）

なんとかしてェ〜な

馬越郁栄

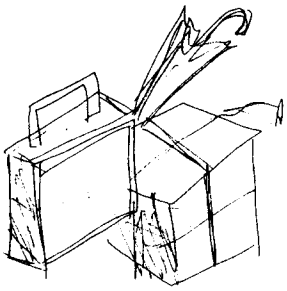
頼りは　点字ブロック

夫婦とも視力障害者の私達は、まがりなりにも道を一人歩きすることが多くなります。四四号で秋野さんから地下鉄・天王寺駅などの点字ブロックの周りの状況をお聞きして、温かいお心に深く感謝致しております。

点字ブロックを頼りに歩きます私達は、ホームはもとより駅構内でも、わざわざといゝたいぐらいに点字ブロックの上に荷物を置き、立話をしておられるらしい、そういう場にぶつかることがたびたびあります。

あるとき、ぶつかった奥さんにすごくご機嫌ななめな感情をぶつけられましたので「ここは、視力障害者が通していただく道です。」というと「あー　そう」と。

世の人たちにお願いしたいのは、点字ブロックの敷いてある意味を深く理解していただきたいことです。また、温かく視力障害者に手引きの声を掛けて下さるよう、多くの方に深く感謝しながら歩行出来ますことをお願いいたします。（墨字訳…石田律）



編集後記

「……（略）……『ホームの点字ブロック』は普通ならば、大切な役割ということに気付かなきゃいけないのに、今まで気にしたことのなかった自分をはずかしく思いました。……（略）……」本紙４４号の＜なんとかしてェ〜な（ホームの点字ブロック上に立たないで）＞を読まれてのご感想を頂きました。もう一通「＜おしゃれって、いいね。＞を掲載したその次の例会に、あいか彩子氏の「おしゃれで拡がるコミュニケーション」を企画するとはサロンもニクイね…」というのも。（石）

＜サロン・あべの＞第４５号
発行日　平成　２年　３月１７日（土）
発行・編集＜サロン・あべの＞運営委員会
［大阪市阿倍野区阪南町6-3-26
電話(06)691-1028冨田慶子］
印　刷　セルフ社　電話（06)691-2365
［阿倍野区西田辺２－２－１０
グレース鶴ヶ丘１０１号］
定価　￥６２．